

5年間の講座運営における成果 Mission 「未来リテラシーを育む」

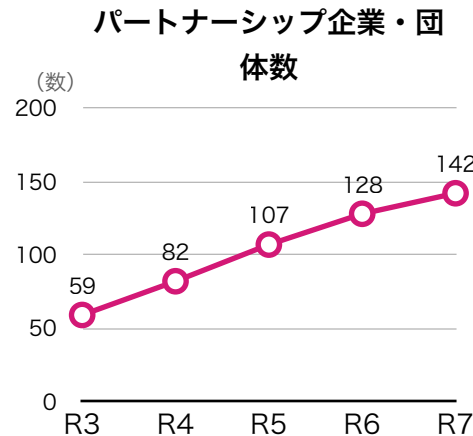
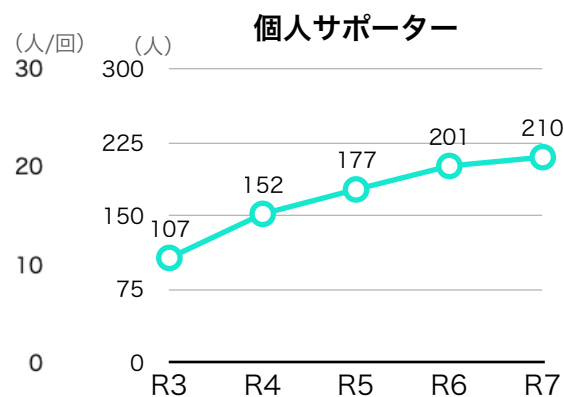
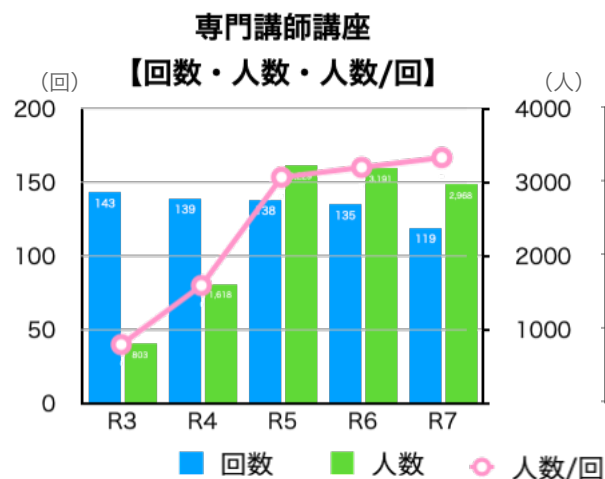
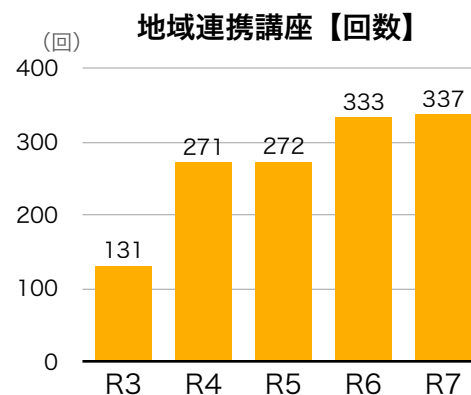
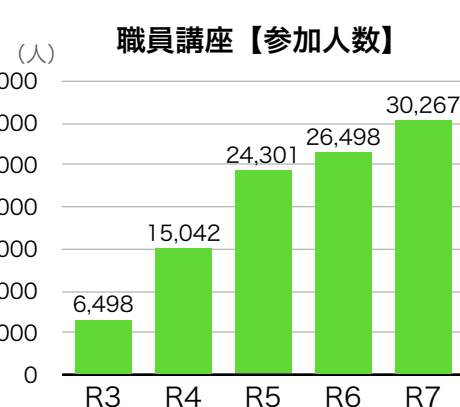
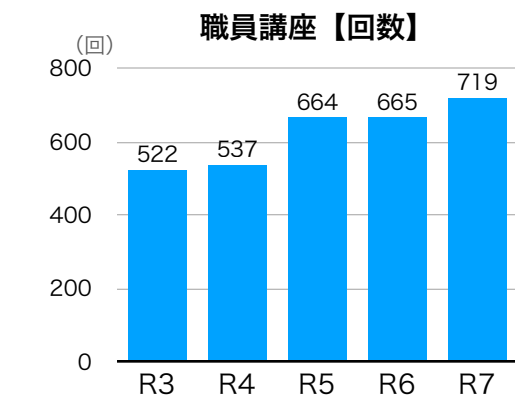
「未来リテラシーを育む」実践の5年間

未来館体験ひろばでは、この5年間、専門講師や職員講座、地域連携、こども参画、意見反映、中高生の居場所づくりなどを通じて、こどもが安心して過ごし、興味を見つけ、人や社会とつながる機会を重ねてきた。本資料では、①中高生の居場所づくり【中高生も自分らしく過ごせる】、②地域・学校との共創【地域や学校と一緒に作る】、③日常を支える職員講座【いつ来てもたのしい】、④こども参画【こどもが主役になれる】、⑤こどもの声の意見反映【こどもの声をカタチにする】、という5つの観点から整理した。

5年間の発展概要：体験の入り口づくりから、参画・社会接続へ

年度	特徴	主な取組み	生まれてきた変化
R3 / 2021	入り口をつくる	職員講座、体験ひろば実行委員、紙相撲、作品展	未来館に来れば何かできる
R4 / 2022	参加から参画へ	発明クラブ、みらいフェス、デジタル隊、乳幼児講座、夜ラボ、えほん図書館連携	こどもが企画に関わる機会が増える
R5 / 2023	参画、継続的な活動へ	スライム村、こども講師、マイクラ部、未来の〇〇サミット、Hello, World	単発イベントから、継続的な活動・探究、参画へつながる
R6 / 2024	声で場を変える	あそびアイデアチャレンジバトル、小牧市こども計画意見表明WS、市職員との共同PT	こどもたちの声を聞く、場やルールの改善に繋がる
R7 / 2025	社会とつながる	こども商店、商品開発部、夢☆チャレンジ科、JUMP OUT! Project、他児童館出張講座	こどもの関心や声が、社会へ接続する

主要数値で見る5年間の推移



数値から見た到達点

1. 日常的な体験機会は高い水準に到達

日常的な体験を支える職員講座は年間500回以上を継続し、R5以降は664回から700回超へと高い水準で推移している。日常的にこどもが体験や挑戦に出会える機会をつくってきた。

2. 専門講師講座は、学校や家とは異なる体験の入口に

専門講師講座は、学校や家では体験しにくい専門性や外部の知見に触れる機会として運営してきた。来館者アンケート等で寄せられた関心やニーズも踏まえながら、職員講座や地域連携講座とは異なる専門的な体験を届ける役割を担っている。

3. 地域連携講座により、社会との接点が拡大

地域連携講座の実施回数は増加し、地域、学校、企業、行政、関係機関との接点が広がってきた。こどもが未来館だけでは出会えない大人、仕事、技術、文化、社会課題に触れる機会が増えている。

4. 個人サポーター・企業等とのつながりが運営基盤に

個人サポーター数やパートナーシップ企業・団体数も増加している。資材提供、企画協力、専門的な知見など、未来館の体験を支える関わり手が広がってきた。

5. 次は「増やす」だけではなく「組み合わせて活かす」段階へ

来館者数、同時利用者数、場所・時間・人員の制約を踏まえると、今後も同じペースで回数を増やし続けることは現実的ではない。これからは、職員講座、専門講師講座、地域連携講座、個人サポーターや企業等との連携を目的に応じて組み合わせ、体験の多様性や質を高めていく段階である。

5つの観点別：R3～7の推移と5年の成果

観点	R3～R7の推移	5年間の成果
①中高生も自分らしく過ごせる	・R3：3F体験ひろばを中心に、中高生も参加できるデジタル、音楽、工作、プログラミング等の講座や表現活動を展開。 ・R4：夜ラボなど、中高生世代が未来館で過ごし、関心を広げる機会を実施。 ・R5：デジタル隊やマイクラ部など、継続的な活動を通じて、中高生も自分の関心に応じて関われる場が広がった。 ・R6：2F交流ひろばへの関わりが具体化し、中高生の声を受け止めながら、うたリク、食事利用、利用環境の改善などにつながった。 ・R7：こども会議、JUMP OUT! Projectなど、中高生が自分の声や関心をもとに、未来館や地域・社会に関わる動きへ広がった。	中高生の利用は、講座参加や一時的な利用にとどまらず、2F交流ひろばを中心とした日常的な居場所へ広がってきた。中高生の声をもとに、うたリク、食事利用、こども会議、Wi-Fi利用など、過ごし方や利用環境と一緒に見直す取り組みも生まれている。また、JUMP OUT! Projectのように、未来館を拠点に高校生が地域や社会へ一歩踏み出す社会参画の機会も生まれ、中高生にとって「過ごす場」から「挑戦につながる場」へも広がりつつある。
②地域や学校と一緒に作る	・R3：サポーターや地域団体とのつながり、交流・体験CAMPを基盤として、地域とともに講座をつくる土台が形成された。 ・R4：えほん図書館連携、おしごと冒険村など、地域・公共施設・企業と連携した体験機会が広がった。 ・R5：発明クラブ、未来の〇〇サミット、みんなで育てようWSなど、地域や企業とともに未来館の活動を育てる動きが具体化した。 ・R6：企業・団体との連携や資材提供、地域連携講座が広がり、こどもが多様な大人や仕事、技術に出会う機会が増えた。 ・R7：夢☆チャレンジ科、JUMP OUT! Project、企業・大学・行政との連携など、学校・地域・社会とつながる学びへ発展した。	こどもたちは未来館だけでは出会えない大人、仕事、技術、文化、社会課題に触れる機会を得てきた。地域や学校、企業とのつながりは、単発の講座協力にとどまらず、資材提供、企画協力、学校連携、企業・行政との共創などへ広がっている。こうした連携は、こどもの学びや将来の選択肢を広げるとともに、未来館だけでは生み出しきれない体験を支える基盤になってきている。
③いつ来てもたのしい	・R3：工作、iPadイラスト、ドローン、GarageBand、紙相撲、作品展など、デジタルからアナログまで多様な体験の入口をつくった。 ・R4：乳幼児親子向け講座、デジタル隊、Neo Beat KAMISUMO、コマドリアニメ、AR動画など、対象年齢と表現の幅が広がった。 ・R5：デジタル隊がマインクラフト等を活用した継続的な活動へ発展し、日常の体験が協働制作やプロジェクトへの入口になった。 ・R6：自由工作や資材を活かした制作環境が広がり、こどもが自分で素材を選び、考え、工夫してつくる姿が生まれた。 ・R7：学校連携、出張講座、ボードゲーム、発明クラブ等への接続が進み、日常の体験が次の挑戦や外部の学びの場へ広がった。	未来館の「いつ来てもたのしい」を日常的に支えているのが、職員講座である。工作、デジタル、音楽、造形、自由工作、乳幼児親子向け講座、デジタル隊など、多様な入口を用意し、こどもが自分の興味やペースで参加できる環境をつくってきた。特別なイベントの日だけでなく、日常的に小さな発見や挑戦に出会える場として、日常の運営をしている。
④こどもが主役になれる	・R3：体験ひろばこども実行委員会を通じて、作品展、紙相撲大会、でっかい車の修理など、こどもが活動や環境づくりに関わった ・R4：みらいフェスで、こどもがイベントを企画・準備・運営する経験へ発展した。 ・R5：スライム村、こども講師、マイクラ部など、こどもが講師・企画者・運営者として関わる活動が広がった。 ・R6：未来の〇〇サミット、ボードゲームテストプレイなど、こどもが社会の仕組みや外部の企画改善に関わる機会が生まれた。 ・R7：こども商店、商品開発部など、日常の遊びや企業連携を通じて、こどもが企画者・運営者などの役割を担う機会が増えた。	R3の体験ひろばこども実行委員会を起点に、R4のみらいフェス、R5以降のスライム村、こども講師、マイクラ部、R7のこども商店、商品開発部へと発展した。こどもは参加者にとどまらず、講師・企画者・運営者など、多様な役割を担うようになってきた。こどもが自分の好きなことや気づきを出発点に、他のこどもや大人を巻き込みながら活動をつくる経験が広がっている。
⑤こどもの声をカタチにする	・R3：体験ひろばこども実行委員会などを通じて、こどもの「やってみたい」や気づきを活動に反映する初期の取り組みが生まれた。 ・R4：みらいフェスなど、こどものアイデアを実際のイベントとして形にする経験が生まれた。 ・R5：こども講師、マイクラ部、スライム村などを通じて、こどもの声や関心が継続的な活動や改善へつながった。 ・R6：2Fプロジェクト、小牧市こども計画への意見表明など、こどもの声を集め、空間・講座内容・行政施策へつなげる動きが具体化 ・R7：こども会議、Wi-Fi運用、アンケートなどを通じて、こどもの声を聞くだけでなく、実際の運用改善や大人社会との対話へ	こどもの「やってみたい」を講座や活動に反映する段階から、2Fプロジェクト、こども会議、来館者アンケートを通じて、こどもの声を空間・設備・ルール・外部との対話へつなげる段階へ進んだ。声を聞くだけでなく、実現できることや難しいことをフィードバックしながら、こどもと一緒に場を変えていく実践が生まれている。

5つの観点別：成果から見えてきた課題と今後の方向性

観点	見えてきた課題	今後の方向性
①中高生も自分らしく過ごせる	中高生の利用が増える中で、生活・行動面に困りごとを抱える中高生への対応が新たな課題となっている。本人たちを排除せず関係をつくることが重要である一方、他の中高生や保護者にとっても安心して過ごせる場であり続ける必要がある。	排除ではなく関係形成を基本に、中高生が安心して過ごせる居場所づくりを進める。家庭・学校・行政等や専門性を持つ人材・関係機関との連携を強めながら、本人の育ちと場全体の安心を両立し、社会とつながる場として広げていく。
②地域や学校と一緒に作る	連携希望や共創の機会が増える一方で、スペース、実施日時、職員の調整・伴走にかけられる人員には限りがある。今後も単純に回数や団体数を増やし続けることは難しく、連携の受け止め方や育て方を見直す段階に来ている。	未来館の日常的な体験機会を基盤に、地域・学校・行政・関係機関との連携をさらに活かし、未来館だけでは生み出しきれない体験の多様性や質を高める。単発の協力にとどまらず、こどもの育ちやMissionに結びつく連携を継続的に育てていく。
③いつ来てもたのしい	職員講座はすでに高い実施水準にあり、人員・場所・時間の制約を踏まえると、今後も回数を増やし続けることは現実的ではない。今後は、日常的な体験機会を支え続けながら、職員の工夫や講座づくりの知見を共有し、限られた資源の中で体験の幅や質を高めていくことが課題である。	回数の拡大だけを目指すのではなく、日常的な体験機会を維持しながら、こどもが遊びを選び、考え、試す余白を大切にする。職員一人ひとりの工夫をチームの知見として共有し、未来館らしい体験設計を継続的に高めていく。
④こどもが主役になれる	こども参画の機会は広がっているが、大型事業や意欲の高いこどもに偏らないようにする必要がある。日常の遊びや関心から生まれる小さな参画を、どう見つけ、支え、広げていくかが課題である。	大型事業だけでなく、日常講座や遊びの中にある小さな参画を大切にする。こどもが講師・企画者・運営者などの役割を担える機会を増やし、大人は先回りして正解を与えるのではなく、こどもの試行錯誤を支える伴走者として関わる。
⑤こどもの声をカタチにする	こどもの声を受け止め、判断し、実現可否を返す流れは、まだ一部の職員やチームの経験・調整力に依存している面がある。受け止めた職員によって、声をカタチにできる範囲に差が生まれやすい。	こどもの声を聞くだけで終わらせず、受け止め、判断し、実現できること・難しいことを返す循環をつくる。特定の職員の個人技に頼るのではなく、未来館全体でこどもの声に応答できる仕組みへ発展させる。

これからの「未来リテラシーを育む」

未来館体験ひろばは、この5年間、日常の運営、職員講座、専門講師講座、地域連携、こども参画、意見の反映などの実践を積み重ねながら、Mission「未来リテラシーを育む」を大切にしてきた。講座数や連携数は大きく広がった一方で、来館者数、同時利用者数、人員・場所・時間などの制約を踏まえると、今後は単に回数を増やすだけでなく、一つひとつの取り組みを、日常的に通うこどもも、初めてくるこどもも、安心して過ごし、興味を広げ、深め、試行錯誤しながら人や社会とつながる体験へつなげていくことが重要であると考ええる。また、こどもの背景や困りごとが多様化する中で、社会福祉士や臨床心理士などの専門的な視点を持つ職員が関わることで、日常の関わりや支援の幅を広げていくことも考えられる。